

ALS 進行期における“最期まで自署したい”という意思を支えた在宅支援の一例

株式会社 REHANOWA

リハビリ訪問看護ステーション Moana

石橋 昌也

【目的】

筋萎縮性側索硬化症（ALS）進行期において、本人の「最期まで自分の力で署名したい」という強い希望を実現するための支援を行い、その実践を報告する。

【事例の概要】

56 歳男性。令和 7 年 8 月に ALS と診断、同年 11 月より訪問看護・訪問リハ開始。車整備業の 3 代目経営者で母・姉と経営。責任感が強く頑固な性格。11 月時点で両上肢挙上約 50°、握力 5kg。令和 8 年 2 月には挙上約 20°、握力は著減。歩行は可能も体力低下あり。同年 4 月の会社引き渡しに際し「自分で署名したい」という強い希望あり。

【介入及び結果】

上肢機能低下に対し、肩甲帯・肘・手関節の支持性向上を目的にポジショニングを調整。体幹固定と肘接地により振り子様運動を活用し書字動作を代償した。さらにペンの太さ・重量・素材・グリップを比較し操作性の高いものを選定。反復練習と机高・座位の環境調整により動作の再現性を高め、最終的に自力で署名可能となった。

【考察】

ALS 進行下では随意運動の自由度低下に対し、残存機能を基盤とした運動戦略の再構築が重要である。本症例では遠位筋出力低下に対して近位筋を優位に使用するため、肩甲帯が挙上しない机高、肘関節約 80° 屈曲位で上腕を体幹に接地させ上肢重量を支持面へ伝達し筆圧調整を可能とした。さらに肘接地を基点とした振り子様運動により効率的な書字動作が可能となるように工夫を施した。手関節軽度背屈位および母指・示指でのペン固定、加えて自助具選定により把持が可能となり自力での署名が可能となったと考える。加えて本症例では「署名」という本人にとって極めて価値の高い目標と、頑固さゆえの強い遂行意欲が継続的な訓練に繋がったことも功を奏したと考える。生活歴や価値観に基づく目標設定と多職種連携が、在宅支援における QOL 向上には重要である。